人間の世に灯火を：ジュニア・ユースの教育

マリリン・ヒギンズ

バハオラの原則の一つは普遍的な教育の必要性である。肉体と理性だけでなく、心も教育を必要とする。適切な教育を受けなければ、人間は本来持つべき能力を奪われるとバハオラは述べた。近年、世界全体に見られる社会崩壊、様々な危機と混乱が特にユースに大きな影響を及ぼしているが、その情勢の中で、万国正義院は、ジュニア・ユース（9歳から16歳である小学校高学年と中学校の生徒）に世界中のバハイが注目するように指示してきた。今日の発表では、生理的、社会学的、心理的と精神的な観点から見て、ジュニア・ユースが必要とすることを検討する。その後、バハイ共同体においてジュニア・ユース・プログラムについて概念と実例を通じて説明する。同プログラムは、幸せで自信に満ちた、人類に奉仕するのにまったく積極的である市民になれるよう、若者を育成する教育環境と社会に適応させられる機会を共同体レベルで作り上げることができる。

『子どもたちは、共同体が所有する最も貴重な宝です。将来の希望と保障は子どもたちと共にあるのです。将来の社会がどのような性質のものになるか、その種は子どもたちが持っています。』万国正義院　レズワン、メッセージ2002

序章：ジュニア・ユースへの私たちの道徳的義務

2009 年になり、「平成」に生まれた世代がはじめて成人になる。彼らは幼少時代を 1990 年代で過ごし、衛星放送テレビやファックスやインターネットのない世の中を見たことがない。彼らは小さいときから携帯、メール、デジタルカメラやユーチューブ（You Tube）などの国際的に発信できる先進技術に囲まれているだけでなく、テロリストへの恐れ、エイズ、世界で流行している病気、想像できないほどの富がある中での貧困と飢え、環境の不安定さ、様々なレベルでの社会崩壊と道徳の崩壊などの社会をむしばんでいる物事の見解の中にいるのである。今日のユースは、近い将来大人になり、そしてまだ想像できない遠い将来の規範となる担い手である。

私たち大人は、どのように今日の子どもたち、ユースたちの人生の形づくりを手助けしてきただろうか？万国正義院のリドヴァンは2000年に、「社会の未来を生み出す種は、大人が子どもたちを尊重する社会を構成するか構成できないかによって大きく形づくられる。それらは、刑罰を受けない社会はないのだという信頼である。すべてを含む子どもたちの愛、子どもたちと接するマナー、子どもたちに向けられる注意の質、子どもたちに対する大人の言動、これらはすべて必要な心構えの不可欠な要素なのである。」と警告した。

また、同じメッセージで、万国正義院は世界中を通して特別な注意、「創造的な注意」をジュニア・ユースとして知られている 12 歳から 15 歳に向けるためにバハイを呼んだ。この年代の幅は他に書かれたものでは 11 歳（または 9 歳）から 16 歳と広がっている。つまり、おおざっぱに言えば、私たちは小学校高学年から中学生に特に必要なものに注目しているのだ。この年代は「ジュニア・ユース」にあてはまり、時にメディアなどでは「ティーンネイジャー」と呼ばれる。彼らは、自分たちでできることが増え、自主性が発達してきて、本当の「子ども」ではなくなるけれども、まだ自律しきれていない未熟な「大人」だといえる。ここで、バハイが、人が自分の選択や行動に責任をもち、答えることができるようになるのは（「成熟の歳」と呼ぶ）まさに 15 歳だと書いていることを言及しておく。つまり急激な変化が起こり、「成熟の歳」に取り巻かれるこの何年かは、様々な場面において非常に大切なのである。これらの時期の子どもたちに特に必要なことを理解するために、この時期の男の子、女の子に身体的、知的、社会的、道徳的にどのようなことが起こるのかを簡潔にみていく。

ジュニア･ユースの特徴
生まれてから３歳、４歳の間の急激な成長の時期の後、小学校低学年の子どもたちは、比較的安定してゆっくりとしたペースで成長と身体の変化が起こる。そして突然、女の子も男の子も「思春期」と呼ばれる時期に入り、自分で自分が分からなくなるような急激な身体と感情の変化を体験する。背が急に高くなって服や靴が一晩で入らなくなったりする子もいる。外見の変化、声の変化、体毛の変化、またその他の身体的成長が、日々自身を認識できなくなるくらい突然に起こる。力が強くなり、筋力がつくことはさらなる身体的なチャレンジを試みるようになる。その頃の子どもたちが、自己中心的になり、気分屋になったり、外見や自分のイメージ、どういうふうになりたいのかを気にしはじめるのは自然なことである。

また同時に、今まで以上に知的能力も高まり始める。子どもたちは抽象的な概念を理解することができるようになり、倫理や言葉のゲームをもっと楽しめるようになる。促されれば、自分独自の考えも表現できるようになる。けれどもまた、自分独自の考えを聞かせることと自分の考えを頑固に変えないというバランスをとることに苦しむ。社会的にも家庭の外で、自分自身で動けるようになるため、今まで近くにいた家族の一員としての役割以外に、新しい自分のアイデンティティを見つけはじめる。それらは普通、彼らの生活の中で少なくとも二つの明確な要素がある。家庭と学校である。学校の友だちや先生たちの自分に対する、物事ができるかできないかという定義づけが今までより重要にとなる。もっと大きな集団の状況の中で、可能性を感じる方法をさぐりはじめる。この感情的成長の時期は、単に喜びか痛み（身体だったならば）、感じる愛への応答、両親に属している（幼少期はじめのように）という感覚からもっと大きなグループや社会に関わる感情を定義する、新しいレベルの道徳的成長に移る。ジュニア･ユースは道徳的価値観をその場所の集団に合わせようとする傾向がある。将来的に、彼らはもっと上の、もっと広い世界的な善悪の感覚と関係している彼らの中の道徳の権威の位置を見いだすことを学ぶため、この時期を乗り越えるのである。けれども、ジュニア･ユースはまだたいてい、そのような段階にはいない。彼らは不思議な世界や、魔法の世界に惹かれ、自然の中を歩いたり、アイスクリームを食べたりするような単純な喜びがまだ大好きである。だからこそ社会が、若い子どもたちの人生にとって大切な部分となる。

人との関わりとその意味

最近、アメリカでＹＭＣＡとダートマウス大学に委託された研究では、なぜ今日の若者たちが富や機会があふれるほどあるのにも関わらず、また心理的、そして社会的混乱が増えることを体験しているのかを探ろうとした。このプロジェクトのおかげで、生化学や脳研究から社会学、心理学、文化人類学や教育まで、様々な分野から研究者を集めることができた。研究者の「人との関わりの重要さ」という報告書によると、子ども危険対策委員会の研究者が、人間は生物学的に「準備万端」の状態、または、他の人との関わり、すべての物事の意味との関わりの二つの関わりをもつようにデザインされたと述べられた。「なぜアメリカで、幼少期に他の人との親しい関わりや道徳的、精神的な意味の関わりを十分に持てていない危機を起こしているのか」ここでは、昔から、人は社会や文化によって、若者の青春期の力やエネルギー、積極的で意味のある社会の方向に動かされてきたと指摘した。伝統的に、物事の意義を見つける努力をすることと、しっかりとした家族の基礎を保障し、未来の世代を育てるためのいい条件を維持するような社会的役割準備をするために、性的行為を含む若者の成長の力のガイドラインを設定することで文化は一致されてきた。文化を超えて、道徳心は、子ども時代の後半と思春期の初めに理想化された個性やアイディアが関わっていると認識されている。このことが、若者がヒーローの話などに刺激され、もっと広い社会でヒーローのような行動を起こす時期なのである。なぜなら、彼らはもっと複雑な出来事を理解するようになり、さらに広い様々な社会のネットワークを発達させ、今の自分よりもっと高くもっと広い新しいレベルの意

義を見つけようとするからである。ガットマン（ibid）が言及したように、「畏敬、賛美そして理想化」における生まれつきの能力が喚起され、刺激されるのを待っているのである。もし、彼らが属している社会に良い選択の余地を与えられないのならば、彼らは「畏敬」の感覚を知りたいという思いを満たすために、身近なスポーツ、美術、音楽やまたアルコールやドラッグで感情を変化させた状態になることや「リスク」の高いことをするだろう。科学的な研究で、もしも生物学的、社会的、感情的に必要なものが、人が発達している時期に適切な方法で適切な時期になかった場合、脳に障害が出たりゆがんでしまうと示された。その人は攻撃的になるか社会から引きこもってしまうという二つの極端な方向性が（時には変わるがわる）出る傾向がある。世界中で近年、伝統的な「社会」というものがすべてなくなってきて、地元・ふるさとの影響が「仮の社会」の感覚に置き換えられ、一般的な商業の営利目的な力がメディアや広告によって助長されている。若い人たちは消費材や流行の音楽やファッションを中心に自分たちのアイデンティティを確信していくような企画のターゲットにされているのである。商業の営利目的な力は、道徳的発達や長い目で見た幸福、若いターゲットの誠実さをほとんど気にしない。もっと欲しい欲しいと思っている人は商業本位の文化の力がおよんでいる典型なのである。

けれども、そこにどんな意味があり、そしてそんな狭い興味・関心で本当の関わりをもつことができるだろうか。自己満足主義の文化は社会崩壊や人々の言動の危機を導くだけである。１９８８年にバハイ国際普及センター（*the International Teaching Center of the Baha'i Faith*）は次のような特別なメッセージを送った。『10 歳から 16 歳までの年齢層について特に考えています。人はこの時期に、「成熟の歳」に達します。このユースの初期は、特に今日の世界においては、非常に困難な時期です。しかし同時に、「聖なる書物」によれば、根本的な道徳的・精神的原則を把握する能力は、立派な人格の光を明らかにしますが、その能力は子供らの内に収められているのです。これは、何千人もの子供たちが大業に入ってきて、しっかりとデイープニングされた大業の教師になるよう援助されると、彼らは代わって、同年齢層の子供たちを救うことができるのです。人類史のこの退廃した段階においては、精神的な戦いは、街角や通り、学校の廊下、レクリエーションの場で勝利を収めることができるのです。』

19 世紀の中ごろのバハイの歴史のはじまりに、理想主義と若者のエネルギーは社会全体に肯定的で必要な要素として喜ばれてきた。若者は人々の調和のメッセージの使者だと呼ばれ、この新しい時代の平等の基準、正義にふさわしいとされた。 プロとしてリーダーシップをとること、それぞれの職業でいい仕事をするために教育、準備される間にも若者たちは社会生活に積極的に関わっていくべきである。近年、世界センターからのメッセージで、若者たちがもし適切なサポートと機会を与えられたならば、彼らの世代と未来の人々に前向きな社会変化を与える効果がある人になるであろう、とあった。

バハイは、「適切な教育を受けなければ、人間は本来持つべき能力を奪われる」と書いた。(Gleanings,) 「適切な教育」に必要なことは何かという問いを導くものである。社会科学では何世紀も、このことについて研究をし、何千もの研究から見つけられた結果がまさにバハイ・コミュニティーが世界で発展した時期と同時にバハイが書いたものであった。「子ども危機対策委員会」では、例えば積極的で責任感があり貢献できる大人になれるように教育し、支えることができる社会、つまり「信頼できる社会」にはどんなものが必要なのかということに注目している。（表1を参照）

表1．信頼できる社会の特徴

- 青年、子どもを含む様々な世代がいる社会
- 子どもを　のように扱う（それぞれの成長の過程を大事にする）
- あたたかくしつける

・　明確な規則と期待していることを決める
・　長いスタンスで見る。
・　中心となる仕事を専門家でない人が行う
・　精神的･宗教的な成長を喚起させる
・　「いい人」とはどういう意味なのかをよく考えて理解しあう
・　すべての人々の平等な尊厳と隣人を愛するという原則の教えを考える

よく組織化されているバハイ社会では、様々な核となる活動の中でひとつひとつの質を具体化することに積極的に取り組んでいる。これらの活動はバハイがどこに住んでいても発展できるように励んだ活動である。

他のアメリカベースの研究組織の研究会の研究員たちは、１２００もの社会科学の研究をまとめ、子どもだちに社会的、感情的な健やかな成長には「４０の資産」が著しく関係していると認識した。(Lerner & Benson, 2003) この「４０の資産」は4つの「外的資産」（子どもの周囲の状況）と4つの「内的資産」（子どものうちに存在する状況）に分けられる。（表 2 参照。すべての資産のリストはこの記事末に記載）

表2．原理の追求：成長を促進させる４０項目の資産

外部から
・　支援ー家族、学校、地域によるもの
・　能力を伸ばすー地域の作業、仕事への関わり
・　境界線と期待ー明確な指導
・　時間の使い方の管理ー質とバランス
内部から
・　学習する義務ー自発的に楽しく学習する
・　良い価値観ー正直さ、思いやり、公平な責任
・　社会的能力ー意思決定、問題解決
・　自己に対する自信ー自己評価、目的をもつ、など

The Search Institute は北アメリカの２０万人以上の若者対象の調査で４０の資産の効果の証明した。前向きな行動と現在もっている資産の数の直接的な相互関係を見つけた。表3は若者のリーダーシップの技術の発達･発揮、健康管理の習慣（誘惑への抵抗やプレッシャーを含む）、様々な人々の違いをありがたく思うような社会適性と同時に学校での成功が、彼らの現在の人生において持っている資産の数との関係についての割合を示しているデータである。

表3．調査：成長を促進させる４０項目の効果：良い姿勢と行動の促進

	0-10	11-20	21-30	31-40
リーダーシップ能力	50%	65%	77%	85%
健康維持	26%	47%	69%	89%
相違を尊重する	36%	57%	74%	88%
学校での成功	8%	17%	30%	47%
ＧＰＡ	2.1	2.7	3.0	3.2

表4ではどの資産が危険行為の防止になるのかを示しており、資産を持っている数が少なければ、アルコールやドラッグの使用問題、暴力や不適切な性行為のような危険行動に関わるようになる若

者の割合も直接、劇的に増えている。

表4．調査：成長を促進させる40項目の効果：危険な行動からの保護

	0-10	11-20	21-30	31-40
アルコール使用	49%	27%	11%	3%
暴力への関わり	61%	38%	19%	7%
性的行為	39%	18%	6%	1%
違法なドラッグの使用	32%	21%	11%	3%

日本では、ジュニア・ユースの生活は勉強と学校のクラブ活動が中心に占められている。多くの子どもたちは、友情や家族との深い絆もっているけれど、社会の関わりの資産が貧しい。一般的に、多くの中学生を取り囲んでいる集団と社会生活への関わりが乏しい。地域社会へ関わる仕事や貢献できる機会が少ないのである。多くの生徒は家族や学校以外の場で、他の年齢の大人や子どもとの接触が非常に少ない。著者（Higgins, 2000）の中学校の研究で、6 人に1人の生徒は、いつでも何でも話せる特別な人が周りにいないと感じていると示された。兄弟、姉妹、いとこ、両親、親戚、友だち、先生や他の大人たち、誰もいないのである。山口市の小学校5年生と中学校 2 年生の500人近くの保護者へのアンケートで、90％以上の保護者は家族と学校のサポートはちょうどいいと答え、少なくとも 3 人に 1 人の保護者は「外的資産」の 20 つのうち 8 つ（40％）は「現在十分もっていない、または現在全くない」と考えられていると示された。4％以下の保護者が、保護者が学校に十分に関わっていると答えた。70％以上の保護者は、子どもたちにとって憧れ・模範となる人物が家庭の外にいないと答えた。驚くことに、45％の保護者がその憧れ・模範となる人物は家庭の中にもいないと答えた。さらに、40％の保護者は近所の人はあまり親切でないと感じている。半数の保護者が、若者は、他の人を助ける機会や学校または地域での役割が一貫していなかったり、公平に与えられていないなど、社会の財産として活躍できるチャンスを十分に与えられていないと指摘した。少なくとも3人に 1 人の保護者が、「内的資産」の 25 パーセントは現在十分にないと評価した。この十分でない「資産」は、学校での約束（75％）、物事の意義の理解（51％）、楽しむための読書（52％）、学業成績のやる気（44．5％）、異なった年齢、背景をもった人と触れ合うことができるような文化的能力（35％）を含む。

ジュニア・ユースのためのバハイ・プログラム

若者の社会生活の不足していることを改善するように、との万国正義院の声に、バハイは体育・知育・徳育の調和のとれた社会創始活動の 3 年間プログラムを発展させた。このプログラムは若者を、家庭、学校、そして地域の 3 つの分野で結びつけ、考えている。道徳教育を基盤とし、社会協力、体育、知育を道徳教育の枠組みで捉える。若者を信頼できる市民にするために、子供から大人へ移行する独特なニーズを有した年齢層、独自の教育的アプローチが必要である。無駄で、中毒になるくだらない活動で、貴重な時間とエネルギーを奪ったりしないように気をつけながら、楽しみながら興味を惹きつける方法で、道徳的責任を養う。バハイのジュニア・ユース・プログラムを通して、ジュニア・ユースは自分たちの心や考え、行動が社会に前向きな変化をもたらすことに勇気づけられた。

グループ内の人数は4～10人が理想である。バハイのみのためではなくすべての人に開かれているこのジュニア・ユース活動は、バハイ社会によって4つの核となる活動の一つである。多くのグループは最低でも月2回、3時間会集まって活動している。若い参加者はグループをひっぱっていく少し年上の若者や大人の指導のもと、様々な活動を通して、積極的な仲間グループの影響を築き、強化していく。目的のある学びと楽しさのバランスのとれた活動の輪の中で、社会的能力を発揮できる機会を共に計画し共に実行する。自分達の興味や今ある資源によって、様々な方法で社会貢

献できる機会を見つけ、計画し、作り出す。例えば、奉仕活動学習のプロジェクトでは、料理の仕方を学んだり、地域のイベントを計画したり、物語の読み方を習ったり、もっと小さい子どもたちと劇をやったりゲームをしたり、思いやりのあるお年寄りの世話の仕方を学ぶなど、グループのメンバーが置かれている環境を向上させるような活動をしたり、といろいろある。子どもたちがこれらの活動を準備し、実行することで、学術的学習と社会的学習を社会が必要としていること、また彼ら自身の将来の目標とつながることをみることができるのである。

このプログラムに織り込まれているいくつかの要素の一つとして、精神統一を経験することができる、瞑想や霊的または静かに崇拝する期間「聖なるスペース」で音楽を使用し、また礼拝や活動を熟考することをはじめることがある。

子どもたちが道徳認識の言葉に接する共同学習の期間がある。初めの段階として、イソップ物語のような内容と単語を紹介する。第二段階として、異なった文化の中で育った子どもたちのそれぞれの人生や困難を比較した話を読み、そして話し合う。最後に、発展した読む力とコミュニケーション能力で自分自身の宣言や約束をつくり、自分たちが属している社会に貢献できるように導いていく。レクレーション、美術、音楽やゲームはジュニア・ユースの積極的な友情の輪の能力をたくさんの側面で発達させ、訓練する助けになる。これらの活動のバランスは子どもからの興味、または社会が子どもたちに可能であると考えられるものからである。

プログラムの構成を説明している日本語でも英語でも読むことができる本、 Walking the Straight Path, Breezes of Confirmation と Drawing on the Power of the Word がある。けれど、この本では参加者同士が自分たちで構成する社会的関わりのすべてのプログラムのほんの一部だけ述べられている。西オーストラリアのあるプログラムの促進者によると[1]、「このプログラムは子どもたちが選択していくなかで道徳的なことが　子どもたちが選択する道徳的なことに気づくための必要な方法・手段を与えてくれる」「また、子どもの表現するパワーを発達させる」とある。ひとつのレベルでは、活動を選択するなかでたくさんの地域自治体があるが、「段階的な問題解決や美徳教育、社会への配慮を含む明らかな目標を達成するために、マナーや原則が選択される背景がある。活動の過程で、実用的な状況での訓練を提供し、社会福祉について学ぶやる気を起こさせることによって、学術的な能力を助長し伸ばす。 今ではもうはっきりと見えるであろうが、バハイのジュニア・ユースプログラムは若者の人生を豊かにする資産を増やすのである。このプログラムは、社会とのつながりをもっと与え、家庭や学校の外で、憧れ・模範的な人物になるような若いユースから少し年上のユース、大人と知り合うきっかけとなる。またプログラムは社会的能力、バランスのとれた時間の使い方の促進、熟考の促進そしてジュニア・ユースに周囲社会への効果的に貢献する機会を与えるきっかけとなる。彼らは理想化と洞察力とのバランスを学び、考えから行動に移すことを学ぶ。練習をすることによって、自分たちの計画と行動が何か変化をもたらすことができる、ということを学ぶのである。このことはこどもたちにやる気を与え、学ぶことのさらに大きな意義を見出すことになる。子どもたちが夢や理想をプラスで現実的な方向に設定している間に、価値観や美徳を日々の生活に入れる助けになる。このような活動は小さい子からお年よりまで社会全体を豊かにし、強くするような資産を築く。

プログラムの促進者のための訓練プログラムはバハイ・コミュニティの核となる活動の「付加」として始められた。けれど、今ではジュニア・ユースの促進者たちの訓練は精神的な知識と能力を育成させ、また文化の変化を普及させる、ルヒ・インシティトゥート (the Ruhi Institute) が主となる連続した学習プログラムに織り込まれ、促進者の訓練は子どもたちの特徴や子どもたちが必要なものの理解、どうやって子どもたちをゲームやふれあい活動、グループづくりやコミュニケーション能力や奉

[1] (Baha'I News, http://news.bahai.org/story/516>)

仕活動学習と社会的に関連づける方法、など実用的な授業を含む。 このようなジュニア・ユースのプログラムはここ何十年かでマレーシアなどをはじめとするいくつかの社会で行われている。バハイの影響を受けたプログラムは世界中で存在し、アメリカで始められたフルサークル・ラーニングや西オーストラリアのピースパック・プログラム（the Peace Pack Program）など同じ考え、または近い考えのもとに組み入れられている。ここ近年で、バハイ・ジュニア・ユース・プログラムは（完璧に構成されていないにも関わらず）日本の高松や山口のバハイ・コミュニティの中でうまく創始されている。 もしもこのまま続けるならば、これらのプログラムは子どもたちがプログラムを「卒業」し、次の世代のジュニア・ユースのための先生やリーダーや促進者になるための新しいものとなる。日本でまだ駆け出したばかりのプログラムだが、もうすでに何人もの内気な子どもたちが社交的になったり、自分の意見がはっきりと言えるようになったり、イヤー・オブ・サービス・ボランティアをするようになったり、ミュージシャンになったり、小さい子どもの教室の先生になったり、海外や日本で地域開発に携わる活動に関わったり、と様々な変化をもたらしている。

まとめ

それぞれの世代の若者は進んだ文明を運ぶためにつくられている。しかしまだその若者たちの能力は「適切な教育」によって育成されないために眠ったままなのである。眠っている、または発展途上の精神的能力は堕落したり誤用されてしまう。適切な教育は精神と身体の教育と同様に心の教育を含むものである。それらは家庭、学校と地域の相互作用が必要とされる。資産の支え、公平な境界線とバランスのとれた時間を使う権限を与えることは子どもたちそれぞれが、これまでいた「巣」からもっと広い世界に飛び立つという意義の感覚を発達させる。バハイはこの急激に変化する歴史の中で特にジュニア・ユースの活動に焦点をあてた。バハイによって勧められた方法は資産、特に現在の社会で失われているものを直接築いた。ろうそくは外からの燃え立とうとする火なしでは光らない。木々はおいしい果実を実らせるためには手入れが必要である。バハオラは今私たちに与えられているものは何でもこの世界で役立ち、世界中の増える恵みの源になるようにとよく天に向かって祈っていた。けれども、他の人の導きの根源となるための能力を訓練するためには、立ち上がり努力をすることが必要である。私たちが今何をすべきなのかはもう明らかである。行動を起こすために立ち上がることだ。

「魂をろうそくの光に、果実の実った樹に、神意の貝の真珠に、天の星にせよ。これが私の神への祈りである。これが私の恵みの海の中で覆い隠すアブハ（Abha）の美しさからの願いである。」（Abdu’l-Baha, The Promulgation of Universal Peace, p. 77）